



少女びより

堀田あけみ

少女びより

少女びより

平成六年八月三十日 初版発行

著 者——堀田あけみ

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一三三

〒102 振替東京三一五二〇八

電話／営業部〇三三八一七八五二一

編集部〇三三八一七八四五一

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本は小社角川ブックサービス宛にお送り
ください。送料は小社負担でお取り替えます。

Printed in Japan ISBN4-04-872817-2 C0093



少女びより

目次

窓から髪を垂らしておくれ

5

綺麗

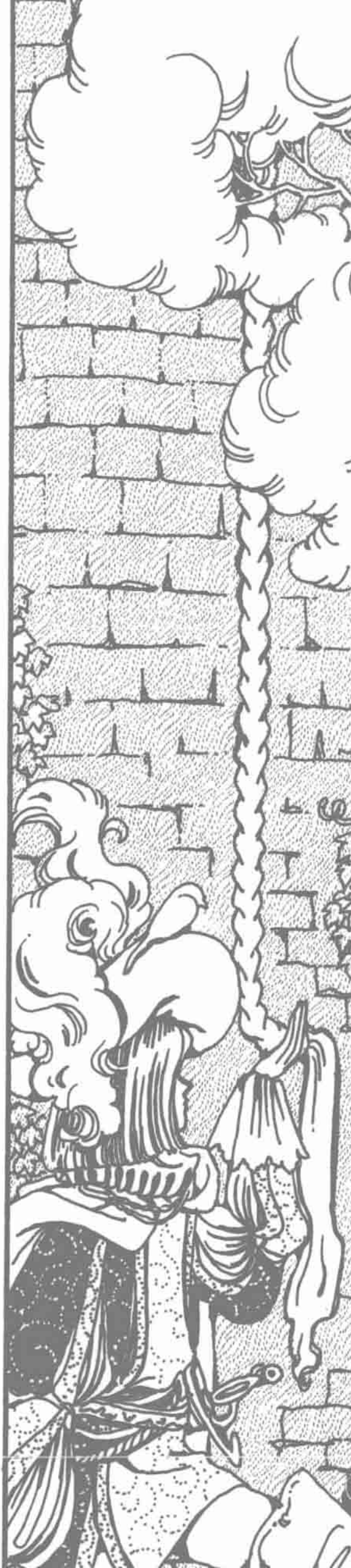
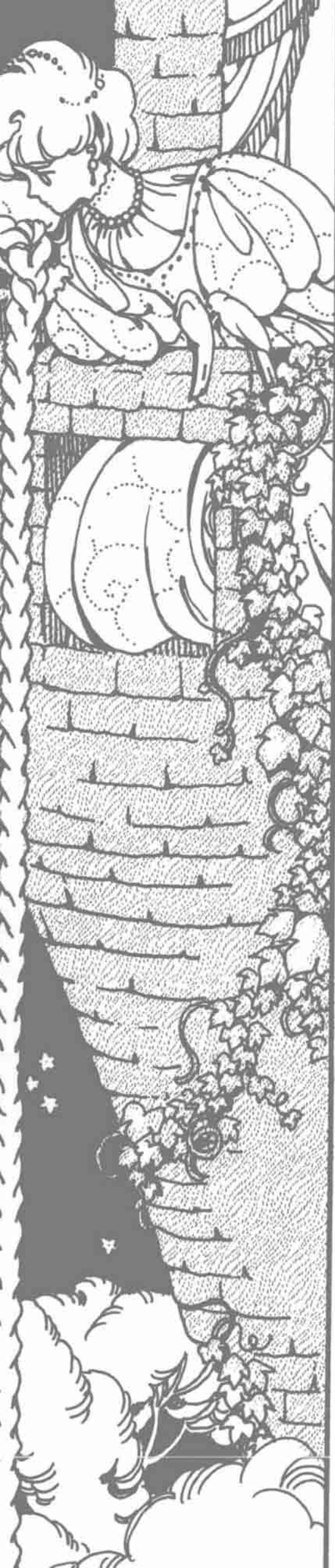
71

忘れたハッピーエンド

145

装丁・扉絵／川原由美子

窓から髪を垂らしておくれ



ラプンツェル

どうして塔に閉じ籠められたの。理由は知らない方がいい。だって、魔女の畑のちしやの葉と引き換えだったんだから。おなかに赤ちゃんがいたから、どうしても食べたかったんだって。少しは我慢しろよ、母親。

どうして王子様との逢いびきが魔法使いにばれちゃったの。それも知らない方がいい。ラプンツェルはとても純真で素直な娘だから、こう言っただけだ。

「おばあさんは、どうして王子様みたいに身軽に登って下さらないの。私、髪の毛が痛くって」

母が母なら、娘も娘。

それでも王子は娘を見つけ、愛の涙で目も戻り、幸せに暮らす二人の間には、元気な男の子そして可愛い女の子。

今度は何をするのやら。

1

妃佐^{ひさ}はデイズニーランドに行つたことが無い。

友達の半分は、高校までの間に、親に連れて行ってもらっていたし、残りの半分は、短大に入ってから友達と行つた。中には親を騙^{だま}して恋人と近くのホテルで一泊して行つた子もいる。

騙されてくれる親ならいい。

騙すも何も、妃佐の親は、たとえ女友達と一緒にでも外泊は禁じている。家族旅行に修学旅行、ゼミ合宿くらいだろうか、今までに外泊したのは。サークルの合宿は行けなかった。引率の教官がいなかったからである。ゼミ合宿のときだって、教官のところに確認の電話を入れられたのは恥ずかしくてたまらなかった。教官も気分を害したのか、当日、

「吉野くんの御両親は、過干渉ではないかね」

と、皮肉ともとれることを言っていた。妃佐としては、

「私も、そう思います」

と答えるしか無い。

中学のときも高校のときも、妃佐は他の女の子と同じように遊びたくてたまらなかった。それが大きく制限されていたのは不満だったけれど、うちはこういう家なんだから仕方が無いとも思っていた。日帰りで行かけるときも、行き先を親に言い、許可を得なければならなかったし、その上に、そこに行つたという証拠を持ち帰らなければならなかった。まるで、お伽話^{とぎ}に出て来る継母の意地悪みたいだ。許可されるのは、親の認めた映画。コンサートは駄目。クラシックなら良かったかもしれないが、それは妃佐が聴きたいとは思わない。図書館はいい。動物園までいい。けれど、遊園地は駄目。

デイズニーランドに行きたい。

親にねだってじゃ駄目だ。うんと言うとも思えないし、そんな天変地異並みのことが起こつたって、親と一緒にアトラクションの前で並ぶなんてできない。嫌だ、この年齢^{とし}になつて。

目的は、スペースマウンテンで悲鳴をあげることではない。親から解放されること。

友達に言わせると、そんなのは簡単に実行できる、ということだ。親が自分をどう見てるかなんて気にしなけりゃ、男友達との外泊がばれたって、同じ家で暮らして行けると。

妃佐は、親から解放されたいと思っている。それなのに行動を起こせないでいる理由は、両親を愛しているからだ。と信じている。愛しているから悲しませたくない。悲しむ顔を見るくらいなら、我慢して、不自由な生活を続けよう。両親だって、彼女を愛しているから、心配して束縛するのだし。妃佐は親想いなのだ。

余計なトラブルを避けたがる事^{ことなか}勿れ主義者ではない。と思いたい。

両親は、妃佐が目の届くところにいる限りでなら、それほど五月蠅^{うるさ}くはない。着ているものや髪型に、文句をつけたりはしない。彼女は、短大に入ると髪を、そこらへんにいるほとんどの男の子より、短いくらいに切った。もちろん、それに合わせたファッションは、ボーイッシュなものばかりだ。大柄で、きりつとした顔立ちの彼女は、そうすると結構目立った。殊に、女性ばかりのキャンパスでは人目をひく。そして、性格も見かけに相^{ふさ}応^わしく、明るくさっぱりしていたので、当然のように人気者になった。彼女自身にとっても非常に快いそのポジションは、しかし長くは続かなかった。当然である。どこに誘っても、

彼女は八時になると言うのだ。

「私、帰らないと。門限だから」

それでも、彼女の努力が結晶したものなのだ。最初は、八時までには家に入っていること、というのがきまりだった。それを、どうにか八時半まで延長してもらった。

そんな彼女は、そのうちに、誰からも誘われなくなった。彼女自身は好かれているので、一緒にランチを食べたり、お茶を飲んだりする友達には不自由しない。けれど、八時に席を立つ人と、遊びに行きたいとは思えない。門限が八時半なんて、コンサートにも誘えやしない。最悪なのは合コンだ。彼女のように目立つ子が早々に席を立つと、残された者まで白けてしまう。

「それって、少し異常だと思うわよ」

友達から言われたことが、何度でもある。その度、妃佐は苦笑するのだ。

「私も、そう思う」

でも仕方無いわよ。子どもは親を選べないって言うじゃない。それに私、他のことでは両親に不満って無いから。そんな気持ちを籠めた苦笑ではあったのだが。

「異常なのは、親だけじゃないわ。妃佐もよ」

友達の一人からそう言われたときには、それがどういうことなのか、見当もつかなかった。そのまま返した。

「どういふこと？ わかんない」

「普通の女の子だったら、反発して、大喧嘩おおげんかの一回や二回、やってると思う。下手へたすると、家出でもするかもしれない。だって、十時や十一時じゃないんだから。二十歳はたちにもなって八時半なんて。中学生だって、塾から帰るのは十時過ぎだっていうのに」

「簡単に言わないでよ。家出なんて言ったら、学費も払えなくなっちゃうわよ。それに、親との関係が悪くなったら、日々の生活が辛いじゃないの。何より、下手に反発すると、折角八時半まで遅らせた門限が、また八時になるかもしれない。もっと早くなりでもしたら、学校の帰りに、お茶の一杯も飲めなくなっちゃうのよ」

「門限が繰り上げられたら、守んなきゃいいんだわ」

「閉め出されちゃうじゃないの。私に野宿しろって言うの？」

「泊めてあげるわよ」

「どっちにしたって翌日には家に帰らなきゃいけないじゃない。そこでどんな騒ぎになるか、うちの両親を知らないあなたには想像できないわよ。騒ぎの皺寄しわよせは、みんな私に来

るのよ。学費出さないとか言われたら、どうすんのよ」

「それはそうなんだけど」

相手も、妃佐と同様に、親の脛すねをあてにしているので、そこまで言うとは洩々でも納得してしまふ。本気で家出するような根性のある友人が身近にいない環境で良かった。押しの強いそういうタイプに引つ張られたら、何かしてしまいかもしれない、という自覚が彼女にはある。但し、それは飛び切り魅力的で、生命力の旺盛おうせいな女でなければ駄目だろう。男では、どうしたって下心が見えてしまふ。

妃佐は、なかなか得な性格をしていた。女性の注目を浴びる割には男性にももてると言うか、男性にもてる割には女性の反感を買わないと言うか。

門限が八時半でも、男性とつきあったことはある。

短大に入つてすぐ、合コンで一緒になった男の子と少しつきあった。学校の帰りに、彼が校門で待ち伏せしていた。

「吉野妃佐さん」

声をかけて来た彼の顔を、妃佐はしばらく思い出せなかった。合コンのときは、時計ば

かり気にして、男の子の顔なんか見ていなかったのだ。

「あの後、田崎さんに番号教えてもらって、何回か電話したけど、取り次いでもらえなかった」

彼が、妃佐の友達の名を出したので、見当をつけることができた。

「家、厳しいんです」

「そうみたいだね。八時に帰っちゃったのが印象的だったよ。それも、気になった理由の一つかな。なんとなく気になって仕方無かった。電話に出てもらえなかったから直接来ちゃったよ。話がしたいんだけど、お茶でも一緒にどう？」

二つ年上だという原山広海^{ひろみ}は、少しの澱みも無くそう言った。言葉は、少し気障^{きざ}だったかもしれない。けれど、見た目にそんな印象は無かった。外見の方に引っ張られて、お茶くらいいいかな、という気分させられたのだろう。「話がしたい」の話というのは、つきあうとか、そういうことだとわかっていて、彼女は、

「そうですね。お茶だけなら、八時までに帰れますから」

と答え、広海を苦笑させたものだ。

彼女は彼に興味を持った。八時半が門限で、電話も取り次いでもらえない女と、どうや

つてつきあおうと言うのだろう。それと知って誘いをかけて来た彼を、このまま帰してしまふのは惜しい。もちろん悪くないと思ったからもある。上手く行くようなら、つきあってもいいと思った。

あたりさわりの無い世間話の後で、彼は言った。

「また、会ってもらえるかな」

彼女は頷いた。

しばらくは、ちよつと得意だった。門限が八時半でも、ちゃんと恋人はできるのよつて。厳しい環境に耐えてくれる分だけ、広海の愛情は深いんだ、などと臆面も無く口にしたことさえある。二十歳の妃佐は、その頃の自分を思い出しただけで赤面できる。あの頃の妃佐は、まだ十八歳でしかなかった。それを自分に言い聞かせ、極力過去は気にしないようにしているのだが、ときとして、憶い出してしまふ。

別の結末が来ていたら、思い出すことくらい構わなかったけれど。広海とはすぐに揉めるようになったから。

「帰っちゃうのかよ」

いつも広海は唇を尖らせる。